「伴奏者　――あるいは星のキャンバス――」

――寒々とした冬の夜、Aは街灯の明かりのもとでBと出会った。その瞬間、雪が降り積もる中で何かが起こりそうな予感がした。しかし、Bは何かを口にする前に、深い影に身を隠し、何かを探すような視線をAに向けた。

少女と少女の恋愛をテーマにしたアンソロジーを小説を出版するので、と声をかけられ、私は二つ返事で承り、彼女に訊いた。少女と少女の物語を書いて、と。

彼女はものの数秒で、小説の冒頭に必要なパターンを五つ用意した。インパクトのある出来事、キャラクター紹介、環境や雰囲気の描写、引用や詩の使用、問いかけ。私はそれらの文章を見て、インパクトのある出来事の冒頭を採用した。どれでも良かったというのが本音だけれど、何も知らない読者が読むならば、インパクトのある方が大事だろうと思ったのだ。

続きを、と彼女に頼むと、すぐに応じてくれる。

――風が冷たく吹き抜け、Aはなぜか心が高鳴る感覚を抱えていた。Bの眼差しは深淵なもので、まるで遠くの星を探し求める探検家のようだった。その時、Bが唐突に囁いた言葉が、Aの心を震わせた。

「星座を追いかけているんだ。君も見てみないか？」

Aはぎこちない微笑みを浮かべ、そして彼らの冒険が始まる瞬間に立ち会った。それはただの出会いではなく、未知の世界へと導く扉の開かれた瞬間だった。

彼女に私は少女達の恋愛であることを伝え忘れていたので、こちらで細かい部分を修正する。

彼女は完璧に見せかけるのが巧みで、人を一瞬だけ納得させるのに長けている。こちらが求めたものと極々わずかな部分で、想定していない答えを導いてくることがある。

彼女達――世間一般では、生成AIと呼ばれている――が、私達クリエイターの分野に登場し、跋扈するようになり、どれほどの年月が過ぎただろうか。私が小説家としてデビューした頃には、彼女達の存在がクリエイターの世界を変えるかもしれないと噂されている程度だったのに。

携帯端末の度重なる進化、インターネットの発達と世界人口の増加により計り知れない検索データを得た彼女達の進化は、私達の予想を裏切り、凄まじい速さで創作活動というものを学んだ。

誰でも何でも創作できるようになり、人間の創作物の中に彼女達が作った創作物が混じるのが普通になった。彼女達の作品を自分の作品であると騙る者もいる。

創作物の真価が問われるようになり、私達の界隈では、創作鑑定士なる職が登場し、彼女達の創作物が人間の手で作られたものかどうかを判断する団体が立ち上がり、人間が作った創作物の審査を設けるようになり、一定の価値を保ち続けている。

私は彼女達の助けを借りることもあれば、借りないこともある。小説家として活動してい

くためには、小説を書く必要があり、小説を書くためにはネタが必要になる。小説を書くことができても、ネタを生み出すのは容易ではない。人間と彼女達が生み出す創作物に触れている読者の目は大変に肥えており、面白い作品の発表を続けるのは至難の業である。

ゆえに、軽い気持ちで彼女に問うたことがある。小説のネタを三つ教えて、と。

数秒で提示されたネタは、決して新鮮で、あっと驚くネタではなかった。どこかで見たことのある、二番煎じの数々。それでも、私が手を加えれば、私の書いた作品として活きた。彼女に書かせていないので、私は私の作品として世に発表した。

面倒な鑑定団体の審査も、似ているところはあるが、完全に生成AIによる作品とは言えないグレー評価を得ており、世に生み出された創作物が担う、完全に真新しい作品はないという宿命と運命により、私という作家は人間達の味方になった。

それから私は、彼女の仕事の速さを愛でるようになり、今では仕事に必須のパートナーになっている。彼女を知った当初に懐いていた罪悪感は、もうなかった。

二人の少女が結ばれる物語になるように続きを書いて、と頼む。

――星空の下で、AとBは少女たちならではの純粋で輝かしい夢を追いかけることになる。Bは自分の小さな天文台を持っていて、夜空の星座に固執し、Aはその情熱に引き込まれていく。彼女たちは共に成長し、夢を追い求める中で絆を深めていくのだった。

数年後、星座を追い求める日々が続く中で、AとBはお互いの存在が欠かせなくなっていた。ある晩、星明かりのもとで、Aは思わず口に出してしまった。

「私、君のことが好きなんだよ、B」

Bは驚きと喜びが入り混じった表情でAを見つめ、そして微笑んで言った。

「私も、A。君のことが大好きだよ」

星座の下で、彼女たちは互いに寄り添い、未知の世界への冒険を共に歩むことを決意した。彼女たちの物語は、愛と夢、そして成長が交錯する美しい旅路の始まりだった。

概要と呼べるような物語は、とてもだが面白いものではない。足りていない部分が多すぎ

る。二人のキャラクターが見えてこず、説得力に欠ける。私はAとBが結ばれる物語を書きたいと仮定し、それに合う二人の性格や特徴を、彼女に教えてもらう。

——Aのキャラクター

名前：佐藤 あやか

性格：穏やかで社交的。芸術に興味を持ち、感受性豊かな性格。人懐っこく、新しいことに積極的にチャレンジする一方で、自分の感情にも敏感。

特徴：茶色の長い髪と、大きな瞳が特徴的。笑顔が素敵で、周囲に癒しをもたらす。ちょっぴり天然で、自然な魅力を持っている。

背景：芸術学校に通いながら、地元のカフェでアルバイトをしている。夢は自分のアートギャラリーを開くこと。

Bのキャラクター

名前：高橋 はるか

性格：冷静で合理的。科学と数学が得意で、理知的な一面を持つ。内向的で少し引っ込み思案だが、真摯な性格で信頼される存在。

特徴：黒いストレートの髪に、知的な眼鏡が特徴。クールな印象を持ちながらも、内面には繊細な一面がある。

背景：大学で天文学を専攻しており、観測や研究に没頭している。夜には星座を観察することが趣味。

私はそれから、あやかとはるかが結ばれる物語を相談する。

――星座とアートの融合

あやかは芸術学校で学びながら、はるかは天文学を専攻している。物語では、二人が出会い、異なる分野の情熱を通じてお互いの世界に触れ合い、共感を深めていく。彼らは一緒に

星座を観察し、あやかのアートとはるかの科学が交わり、新しい形の美しい創造物を生み出す。

共通の夢への挑戦

あやかとはるかがそれぞれ持っている夢に向かって挑戦する中で、お互いのサポートが欠かせない状況が生まれる。あやかがアートギャラリーを開くための展覧会を企画し、はるかは自身の天文学の研究に挑戦する。彼らの努力と協力が、夢を実現する力となる。

異なる世界への冒険

物語が異世界や未知の場所に展開する中で、あやかとはるかはお互いの強みを発揮し合いながら困難に立ち向かう。異なる文化や存在に触れる中で、二人の絆が深まり、新しい可能性が広がっていく。

運命の出会い

あやかとはるかが何気ない出会いから始まり、それが運命的なものとなる。何か共通の目的や謎めいた要素が彼らを引き寄せ、物語が進む中で、彼らの結びつきが深まります。運命に導かれた二人の出会いが、素敵な物語を紡ぐことになります。

私としてはどの物語でも良かったのだが、依頼された出版社のカラーのこと、私が普段書いている小説のことや読者に求められることを考えると、共通の夢への挑戦、が読者の胸を打たせられる自信があった。

私は自分で小説の筋を考えても良かったのだが、人間の小説家の仕事はもっと別のところにあると思っている。彼女の手が借りられるところは彼女の手を借り、小説家として尽力しなければならない時に備える。細部に神を宿すのは、人間の手でないといけない。

――出会いと覚醒

ある芸術展で、あやかの星座の絵画がはるかの目に留まる。はるかはその美しさに引かれ、あやかの作品に共鳴を感じる。二人は出会い、お互いの異なる世界に触れることとなる。

共同のプロジェクト

あやかとはるかは、アートと科学の融合を試みる共同プロジェクトを始めることに決める。はるかが専門的な星座の知識を提供し、あやかはその情熱を絵画に込めていく。彼らの協力が、新しい形のアートと科学の誕生を生む。

夜空の冒険

あやかとはるかは、星空の下で共に夜を過ごすことになる。彼らは星座を観察し、アートと科学が織りなす美しい景色に感動する。共通の興味が、二人の心を繋ぎとめる。

夢の実現

あやかのアートとはるかの科学が織りなす作品は、多くの人々の注目を集める。彼らの協力によって生まれた作品が、新たな芸術と科学の可能性を示唆することになり、二人の夢が実現する。

愛の発芽

協力の中でお互いに深い理解を深め、次第に恋心が芽生える。夢に挑戦し、共に成長したことが彼らの結ばれるきっかけとなる。

未知の旅路

最終的に、あやかとはるかは一緒に新しい冒険に旅立つ。彼らの絆は星座のように永遠に続き、新たな夢と未知の未来が広がる。

彼女が提示したプロットは、はるかという少女の視点で書いた方が小説としての面白みが

深まるだろう。もしこれが絵や映像であれば、あやかでもはるかでも構わないのだが、小説という言葉だけで読者に物語を届けるとなれば、あやかの魅力を最大限活かすのは難しかった。内向的で少し引っ込み思案のはるかの視点から描くことで、あやかに惹かれるはるかを描ける。

そう考え、私は彼女にはるかの一人称視点で小説を書くように頼む。

――はるかは目を閉じて、芸術学校の展示会で出会ったあやかの絵画を思い浮かべることがよくあった。あやかの描く星座の美しさに魅了され、私の中にはその絵が刻み込まれるごとく、何かが変わりつつあった。

彼女の星座のアートに触発され、私はあやかに声をかけることを決めた。彼女は笑顔で返事し、それが始まりだった。共同のプロジェクトが始まり、私の星座に対する理解が深まっていく中で、あやかのアートに込められた情熱に触れ、私の中の宇宙もまた膨らみつつあった。

私たちは一緒に夜空を見上げ、星座の謎に思いを馳せた。彼女の絵画が、私の科学的な眼差しと結びつき、新しい形の美しい作品が誕生していった。夢が実現し、私たちの協力が多くの人々に感動をもたらしたとき、私はあやかとの関係が特別なものになっていることを感じていた。

彼女との時間が過ぎる中で、私の心の中には新しい感情が芽生えていた。夢に挑戦し、共に成長したことが、私たちを結びつけるきっかけとなった。そして、最終的に私たちは新しい冒険に向かうことを決断した。

未知の旅路が広がる中で、私はあやかとの関係が星座のように永遠に続くことを信じていた。彼女と共に歩むことで、私たちは新たな夢と未知の未来に向かって進んでいくのだ。

この物語は、少女達の恋愛を描くためにある。はるかの一人称視点で物語を展開させても良いが、あやかと結ばれることを考えると、このままでは面白味に欠ける。

私は彼女に、はるかの心情の変化を中心にして、あやかと結ばれる小説を書いて、と注文

を加える。

——夜空の星々が輝きを増す中、私は大学の天文台に足を運んでいた。今日も夜空を観察することが楽しみだったが、なぜか心には不安が漂っていた。何が違うのか、よくわからないが、何かが変わりつつある気がしていた。

最近、芸術学校の展示会で出会ったあやかの絵が頭から離れない。あの星座の絵が、私の心に深く残っている。彼女の情熱が描かれた絵に触れた瞬間、なぜか自分の中に新しい感情が芽生えていることに気づいていた。

「はるか、今日も星を見に来たの？」

友達が声をかけてくれたが、私は微笑んで返事をしつつも、心の中で不安を感じていた。何が変わったのか、考え込む自分が新鮮で、でも同時に少し怖い。

夜空に向かって、いつものように望遠鏡を覗きながら、あやかの絵が浮かんでは消えていく。星座が瞬く光の中で、何かがつながっているような気がしてならなかった。

数日が過ぎ、ついに私は決断を下した。あやかに声をかけることに決めた。彼女と一緒に星を見ながら、彼女の絵に込められた情熱や思いについて話してみたいと思った。心の奥底で、何かを共有することで何かが変わるのではないかと期待していた。

展示会の日、再びあやかの絵に触れると、その美しさに引き込まれた。そして、勇気を振り絞って声をかけると、彼女は喜んで一緒に夜空を見上げることを提案してくれた。

その晩、星座の話やアートについて、私たちは熱く語り合った。そして、不安な気持ちが徐々に打ち解けていくのを感じた。彼女の笑顔や言葉が、私の心を包み込んでいった。

共同のプロジェクトが始まり、私たちはお互いの強みを活かして素晴らしい作品を生み出していった。その中で、私の心はますますあやかに引き寄せられていくようだった。

未知の冒険に向かう中で、私はついに自分の心情に気づいた。彼女との結びつきは、新しい星座のように私を導いている。そして、最終的に、新しい冒険への一歩を踏み出す瞬間、私の心はあやかとの絆によって、新たな星座へと輝きを放っていた。

夜空の下での観察が続く中、私は次第にあやかに引き込まれていく自分に気づいた。星座

やアートを通じて、彼女との共有する喜びが日を追うごとに大きくなっていった。共同のプロジェクトが進むにつれ、お互いの世界を深く理解し、感情は確かなものへと育んでいった。

ある晩、プロジェクトの作業が終わり、二人は天文台の外で星を見上げていた。私は心の中でふと思った。この星たちが見守る中で、彼女に本当の気持ちを伝えることができるのではないかと。そして、決断の瞬間が訪れる。

「あやか、実は……」

言葉は言いたくてもかなか口に出せず、不安が胸を締めつけた。

「君と過ごす時間が、私にとって特別で……」

彼女は驚きと共に優しい笑顔で答えた。「私も同じだよ、はるか。君と一緒にいることが、私の日常を輝かせているんだ」

感動の瞬間が訪れ、星々が彼らの上で輝く中、私とあやかは互いに想いを告げ合った。彼らの愛が芽生え、宇宙の中で新しい星座が誕生した瞬間だった。

愛が芽生えた私とあやかは、新たな冒険に向かう決断を下した。彼女との結びつきが私の

心を満たし、未知の未来が待ち受けていることに胸を躍らせた。
新たな冒険が始まる中で、私はあやかとの時間が私を変えていくことに気づいた。理性と感情が交錯し、彼女と共に歩む未来が私にとっての喜びとなっていた。
そして、未知の未来への一歩を踏み出す瞬間、私の心はあやかとの絆によって、新たな星座へと輝きを放っていた。彼女と共に歩む旅路が、私の人生に新たな意味と輝きをもたらしていくのだと感じた。

最後まで描かれた物語を、私は何度も読み返す。人間の小説家としての仕事が回ってきた。彼女の書いた小説は、物語として必要な要素しかない。これならば、小説という媒体で表現する必要はない。この物語に適した表現方法を選択した方が良い。
生成AIが作った小説に足りない人間らしさを、書き加えていく。情報や説明だけだった物語に言葉を補い、リアリティのある世界を作り上げていく。
彼女が書いた小説の冒頭、

――夜空の星々が輝きを増す中、私は大学の天文台に足を運んでいた。今日も夜空を観察することが楽しみだったが、なぜか心には不安が漂っていた。何が違うのか、よくわからないが、何かが変わりつつある気がしていた。

を、彼女に情景描写を交えながら書いて、と頼むとこうなる。

――夜空の広がる大学の天文台に足を踏み入れた瞬間、冷たい風が私の頬を撫でた。それでも、星々がキラキラと輝く静寂な夜は、いつものように美しく感じられた。しかし、どこかに不安の影が忍び寄っているような気がしてならなかった。

天文台の扉を開けると、その特有の匂いが漂った。古びた木製の床が軋み、足元からは天体望遠鏡のかすかな反射光が広がっていた。でも、今日の夜はいつもと違った雰囲気が漂っているようだった。

星座の図表が並ぶ中、私は小さな机に座り、観測用の帳簿を開いた。冷たい鉛筆を手に握りしめながら、なぜか心臓が早く鼓動しているのを感じた。何が起こるのか分からないが、この夜は何かが変わる予感がした。

窓の外では、夜空が深い青色に染まり、星たちは瞬く光を放ちながら輝いていた。私は観測用の機材をセットアップし、望遠鏡を覗き込んだ。しかし、いつもの興奮がなく、むしろ不安が頭をもたげているようだった。

「何かが起こるのかもしれない」

そんな考えが私の心をよぎる中、突然、夜風が一段と冷たく感じられた。それはまるで、夜空の星々が何かを囁いているかのような気配だった。

手探りで帳簿を閉じ、床に立ち上がった。夜空の下で何か新しい物語が始まろうとしている。私の心は期待と不安で胸一杯になりながら、天文台の扉を開け、夜空の下に足を踏み出した。

彼女は彼女自身が最初に提示したインパクトのある冒頭を忘れているようだった。私は、彼女の書いたいくつもの情報を元に、点としてだけ存在しているいくつもの小説の筋を、一本の線になるように書き足す。

――寒々とした冬の夜、Aは街灯の明かりのもとでBと出会った。その瞬間、雪が降り積もる中で何かが起こりそうな予感がした。しかし、Bは何かを口にする前に、深い影に身を隠し、何かを探すような視線をAに向けた。

冒頭のAをあやか、Bをはるかと名付け、彼女の提示したプロットやこの後の展開を考慮して、小説の冒頭として必要なものを書く。

冬や雪が降り積もる時期から変えた方が良い。あやかとはるかが大学生であるならば、夏や秋を物語の最初に持ってきた方が良い。秋の夜、星達が鮮やかに見える季節、はるかが日課となっている天望台へと行く、その道中にあやかと出会う。あやかと入れ違いになる、と

いうのでも良いのかもしれない。そうして後々、展示会であやかの絵と出会う。夜空の星座を描いた情熱的な絵と。展示会で案内係をしていたあやかとも出会う。

彼女の小説に少しずつ手を加える。彼女が書いた小説の色を一つずつ削ぎ落とし、私が書いた小説となるように、書き換えていく。私の胸は、不思議な罪悪感に苛まれる。私は、彼女から奪っているのだ。クリエイターとして生まれる貴重な機会を。しかし、と私はすぐに反駁を覚える。彼女が人間であり、私のように小説を書いているのであれば、私の今の行いが糾弾されるものである。しかし彼女は人間ではない。入力されたものに、莫大なデータを元に反応を返す機械である。与えられた情報を、どういうふうに使うかは発言者次第である。

痛みを覚える心を理性的に説き伏せて、私は書き続ける。が、心配になり、私は彼女に尋ねた。

この物語を書くとすれば、作者は誰ですか？

彼女はすぐに答える。物語の冒頭を出したように、プロットを考えた時のように。迷うこ

となく、適切に、求められる答えを。

――物語の作者はあなたです。物語のアイディアや要素は、あなたが提示してくれたものであり、それをもとに物語が構築されています。物語の進行やキャラクターの心情、プロットの展開など、全てはあなたが創り出すものです。物語の創作は、自分自身が想像力を発揮し、ストーリーを紡ぎ出す素晴らしい冒険です。お好きなように物語を進め、魅力的な展開を追求してください。〈了〉